

## リレー随筆

## 「奄美で牛を買ってみて」

鹿児島県立大島病院 総合診療科 | 渋谷 謙一

この度、河野裕佳先生からリレー随筆のバトンをいただきました鹿児島県立大島病院総合診療科の渋谷謙一と申します。私は元々県立大島病院の救急科で勤務していた他、奄美大島の名瀬保健所、徳之島にある徳之島保健所でも勤務経験があり、合計5年以上は奄美群島で働いてきました。その経験を踏まえて奄美群島ならではの経験をお話したく思います。皆さんは奄美群島と聞いて何をイメージされますか。青い海やサトウキビ畑、ハブなどもあるかもしれません。今回、私は肉牛を購入した経験についてお話します。スーパーで牛肉を買ったわけではありません。競りで肉牛を買うことになったのです。なぜそのようなことになったのでしょうか。

これは私の義父が牛農家を営んでいたことがきっかけです。ある日「けんいち、次の競りですごく良い牛が出る。買わんか？」と提案されました。義父の提案などイエスかハイしか選択肢はありません。私は牛を購入することに決めました。ところで牛はどのように買うのでしょうか。肉牛の購入は競りによって行われます。奄美群島では畜産が盛んで奄美大島で2か月に1回、徳之島では毎月競りが行われます。私が購入した牛は鹿児島本土での競りだったので、義父が知り合いに頼んで購入することになりました。競りなので値段はいくらになるか分かりません。家族で相談し、100万円くらいを上限に購入することを決め、ちょうどそれくらいの金額で購入することになりました。ところで牛の相場はどれくらいなのでしょう。牛の相場は競りによって推移があり、当時の相場は40万円台でした。現在の相場は70万円程度です。皆

さん、今購入するならオルカンやゴールドではなく肉牛ですよ。したがって私たちが購入した牛は非常に高価だったことが分かります。ちなみに私の愛車である中古のラパンは70万円程度だったのでマイカーより高額でした。なぜ牛が高価だったかという理由、理由は血統にあります。我が家の愛牛「さるびあ」の親である「福之姫」は牛界のサラブレッド、ウシブレッドとして名を馳せていたようでした。しかしながら、福之姫はある日急逝してしまい、その子どもたちに注目が集まったという経緯でした。福之姫をネットで調べると急逝のニュース記事が出てくるほど、とても有名で愛された牛のようでした。さて、さるびあを購入して数週間が経ち、彼女は船でやってきました。美しい毛並み、愛くるしい瞳。一目見て私たちは彼女を好きになりました



さるびあ

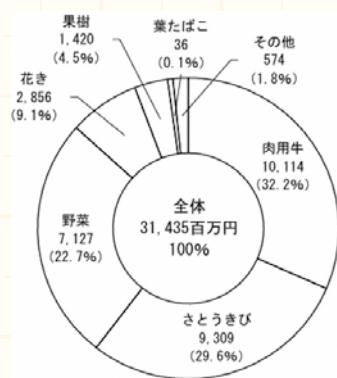
た。最初は私たちを怖がる素振りもありましたが、今では息子の頭を舐めるなどして仲良くしています。なお、この「さるびあ」という名前は私たちが名付けたのではなく、元々名付けられた名前でした。牛の名前は公的に登録されており、鼻紋で登録する「子牛登記証明書」という人間でいう戸籍謄本みたいな

もので厳密に登録されているようです。これにより血統を正確に遡ることができるというわけです。なお、雌牛はひらがな表記、雄牛は漢字表記ということも決まっているそうです。したがって「福之姫」はお父さんになります。この命名については義父が養う牛達が面白く、愛情をもって育てられるようにと家族や親戚の名前をつけたりするそうです。ある牛には「謙一」と名付けてもらいましたが、もう競りに出されて牛舎からいなくなりましたが、「謙一は周りにちょっかい出して意地悪な牛だったけど、競りでは良い値段になったから良かった」とのことでした。ありがとう、謙一。さて、牛の命名だけでも興味深いですが、牛を飼うことで色々なことを学びました。飼育については、私たち自身が実際に育てることはできないため義父の家族がしてくれています。ただ、色々聞いたり調べたりすることで私自身も畜産の世界について少し学ぶことができました。まず、牛農家についてですが、大きく分けて繁殖農家と肥育農家に分けられます。繁殖農家は自分たちの牛舎で産まれた牛を生後10か月程度まで育てて競りに出す農家です。義父は繁殖農家であり、さるびあについては彼女から産まれた牛を育てて競りに出すという流れになります。一方、肥育農家は3年間ほど飼育し成熟した牛を競りに出す農家です。この肥育農家から提供される牛が皆さんの食卓に並ぶ牛になります。興味深いのが、ブランド牛を輩出する肥育農家についても繁殖農家から購入した牛を育てて提供することがあるため、奄美の牛が神戸牛になったり松坂牛になったりすることもあるわけです。皆さんがありがたがって食べているブランド牛も実は奄美の牛かもしれません。

次に、牛をどのように飼育するかについてです。良い牛に育てるためには血統だけではなく、大きさや肉づき、健康状態なども重要になります。牛はストレスに弱いので愛情を持って育てることはもちろん、普段の健康管理にも気をつける必要があります。例えば、

ストレスや感染で下痢になってしまうと食事は摂れないわ、下痢で脱水になってみるみる体重が減るわで大変だそうです。したがって食べ物にも創意工夫があり、最近はある食べ物を一緒に与えると下痢の回数が減ったということでした。食べ物は企業秘密だそうです。その他、肉づきについてもただ体が大きいだけではダメで、良い肉づきにするためには良い骨格である必要があります、良い骨格にするためには良い姿勢にする必要があります、良い姿勢にするためには良い牛の蹄にする必要があるそうです。したがって、削蹄師という専門職があり、彼らが牛の蹄を切り揃え、正しい形に整えます。いわば牛のネイリストです。その他にも色々な職種の方が畜産に関わっており、農協や役場、購買者の方々はもちろん、日々の健康管理に獣医さんが関わっています。興味深いのは授精師という仕事です。これは、牛農家さんから発情している牛の報告があったら牛舎を訪問し、受精可能かどうかを判断、精液注入器を使って子宮に注入するという国家資格です。

このように奄美群島ならではの話として牛の話をしてきましたが本当に牛農家など畜産農家は多いのでしょうか。鹿児島県が発表している令和6年度の奄美群島の概況という資料があり、ここに奄美群島の農業産出額という項目があります。こ



令和6年度奄美群島の概況より

の中で肉用牛は産出額全体の32.2%と最も多い割合であり、奄美群島において主要な産業であることがわかります。鹿児島県全体でも農業産出額の首位は肉用牛であり、鹿児島県においても主要な産業です。鹿児島黒牛は和牛オリンピックで日本一にも選ばれるなど鹿児島が誇る名産品でもあります。こんなに肉牛が盛んなようなのに周りにはいないものだ

など思っていたら、同じ診療科で働く山田先生の実家が牛農家だそうです。やっぱり身近にいるものです。山田先生とはしばしば牛トークに花が咲き、山田先生は私のようなわかとは違って、実家で人手不足の場合は牛の世話を切り盛りするほどのガチ勢です。そこまでの経験があるなら医師と牛農家の二足の草鞋はどうかと提案したところ、「最近の牛業界は情勢が厳しい。本気でやるなら規模を拡大する必要があるし、有力な牛農家は実際そうしている」とのことでした。すごいぞ、山田先生。

さて、ここまでひたすら牛の話をしてきましたが、本職の話をしていないので本職との関連についても話してみたいと思います。私はこれまで救急医療、保健行政、総合診療に携わってきましたが、救急領域や保健行政において現在関心が強いのが災害との関わりです。救急領域においてはDMAT（災害派遣医療チーム）などの災害医療、保健行政についてもDHEAT（災害時健康危機管理支援チーム）など支援チームをはじめ、災害時の保健医療福祉行政については有事だけでなく平時も訓練や研修などに力を入れています。特に奄美群島のような離島では地理的な制限に加え、平時においても資源が限られているため、航空医療は重要であり大規模災害のような有事では広域避難の選択も必要になります。そのような背景を学んで思ったことがあります。災害時、牛はどうなるのか。実際、この問題は畜産農家では死活問題になります。2025年6月、鹿児島県の十島村（トカラ列島）で群発地震が発生、持続し問題になりました。この時、十島村役場は、震源地近辺の悪石島の全域38世帯80人を対象に避難指示を発令しました。しかしながら、このうち畜産農家を含む28人は島外避難をしませんでした。畜産農家の声として、牛を置いていけないという想いが強いのです。これは牛の命が大切であるのはもちろんですが、生活の糧である牛が死んでしまうとその後自分たちも生活ができなくなってしまうため

す。現在、大規模災害の広域避難について、各種自治体や行政、民間事業者、住民ら含め広く議論されておりますが、人々の避難についても討議中の状態です。まして畜産や愛玩動物、その他動物についてはまだまだこれからの印象であり、今後南海トラフをはじめとした大規模災害が想定される現状では喫緊の課題とも言えます。この課題について、公衆衛生学会総会で発表させていただいた他、当院総合診療科部長である森田喜紀先生が中心となって企画された奄美地域医療シンポジウム並行企画「地域医療ポスター展」でも紹介させていただきました。この奄美地域医療シンポジウムのテーマは「ワンヘルス」であったこともあり、題材としてはちょうど良かったかなと思います。ワンヘルスとは、人、動物、環境の健康を一体的に捉えて守っていく、という概念で、世界自然遺産である奄美群島にぴったりの概念だなと感じています。また、畜産も盛んな鹿児島においても、ワンヘルスの概念は非常に重要であると感じています。

以上、牛から色々なお話をさせていただきました。牛に興味を持たれた方は、ぜひ一頭いかがでしょうか。バトンを渡してくれた河野裕佳先生も牛を飼うのが夢とのことだったので、牛仲間を増やしていこうと思います。次回は当院救命救急センター長である中村健太郎先生にバトンをお繋ぎいたします。どうぞよろしくお願いいたします。



第84回 日本公衆衛生学会総会シンポジウムにて  
(2025/11/05 静岡新聞より)

次号は、鹿児島県立大島病院 / 中村健太郎先生のご執筆です。  
(編集委員会)